

風の末裔シリーズ・7th シーズンの6

～ 七時雨(ななしぐれ)・Ⅱ ～



©西風そら

<http://nisikaze.sakura.ne.jp>

「ウッジーンは子供をまじまじと見た。

真っ直ぐな眼差しは濁りがなく、大人をからかう悪ガキには見えない。」

「手紙は僕が代筆したんだ。お祖父さんは手が震えるから書いてあげるよって言って。で、こっそりウッジーンさん宛って入れた。蒼の里の他のヒトは分からないけれど、貴方なら僕を信じてくれると思ったから。ここで二人きりになった時、それを白状して謝ったよね。覚えてる？」

もう、ごまかすのは限界だと思った。

「実は俺……」

「忘れちゃったんでしょ」

「えっ、いやその……」

「そうじゃないかと思ってた」

「いや、聞いてくれ」

「いいよ、忘れちゃった事すら忘れちゃうんだよね。村の皆もそうなんだ。蒼の妖精の貴方まで、忘れ病に冒されるとは思わなかったけれど」

「ワ、ワスレヤマイ？」

「僕がそう呼んでいるだけだから、正式な名前は知らないけれど。とにかく、一ヶ月前、村中がその病気にかかったんだ」

「えっ、なにに?! もう一度」

目を見開いて慌てるウッジーンの前で、子供は落ち着いて繰り返した。

「一ヶ月前、この村が忘れ病に冒された。ある朝起きたら、村人全員、前の日から何日かの記憶を無くしちゃってたんだ」

「そ、それは本当なのか? 村長も誰もそんな事言わなかったじゃないか」

「だから、気付いているのが僕だけなんだってば」

「まさか? 他の者だって気付くだろう」

「ううん、全員が忘れちゃってたら、意外と気付かないんだよ。」

僕も最初は、まさかまさかかって思ったもん」

子供の話によると、ある朝、違和感に気付いた。

些細な事の数々。祖父が何故腰を痛めたのか思い出せないでいる。妹が、大切に取っておいたお菓子が無いと騒ぐ。隣の子が、誕生日に贈り物を買ってはいるが、誰にどれを買ったのか忘れている。

「贈り物をあげた側も忘れちゃってるから、つじつまが合わなくても気付かない。雪で閉じこもりがちだったせいもあったと思う。僕が、変だ、おかしいって訴えても、誰も取り合ってくれなかった。だから、水門を詰まらせて、蒼の里に手紙を出すよ

うに仕向けたんだ。ユウジーンさんなら、きっと僕を信じて、調べてくれるだろうと」

「……………」

子供のいう事は、どうやら信憑性がありそうだ。現に、その『忘れ病』とやらに、自分も冒されている。しかも数日なんてものじゃなく、子供の頃の記憶から「っ」そりだ。以前の自分が、この子供の頼みを聞いて調べている内に、きっと何らかの事故に遭っちゃったんだ。

ユウジーンは、びるっと震えた。

それこそ、自分が蒼の長様に探せと課せられていた答えじゃないか！ こんなに簡単に見つかっちゃって、いいのだろうか。

「そ、それ…、俺の少し後、ここに来た蒼の長様に、何で言わなかったの？」

「ええっ、いつ来たの?! 僕、たまに下の村の教会に行っちゃっから」

「……………」

胸がドキドキした。

とにかくこの情報を、山にいるリリに伝えれば、長様に言われた命令はクリアだ。偶然とはいえ、俺、大金屋じゃん。あの子の鼻っ柱を明かしてやれる。ちょっと小気味がいいぞ。

しかし……………」

小雪の散らつき出した寒そうな空を見上げた。今からの暗い空に飛び上がって、雪洞の場所に行き着く自信がない。明日、明るくなってからでもいいかなあ。あの子、一晩くらい大丈夫そうだし。

自分の事ばかり考えて、目の前の子供が暗い顔になっているのに気付かなかった。

「ごめんなさい、ユウジーンさん。僕が自分勝手な依頼事なんかしたせいで、貴方まで酷い目に遭わせてしまった」

「あ、いや、気に病む事はないよ。命を取られた訳じゃない。記憶喪失くらい、どおって事ないさ」

子供は、目を丸くして、ユウジーンを見た。

「どおって事ないの？」

「ああ、この事については、蒼の長様に報告するから、きっとちゃんと調べて貰える。安心していろ」

「うん、…ね、無くしちゃった記憶、戻るかなあ？」

「うーん……………」

蒼の長様はきっと凄いいつなだろっけれど、適当な事は言っちゃダメだな。

「記憶は戻るに越した事はないが…たった数日間の記憶だろ？」

全員忘れてるんだし、差し当たって困り事もないなら、別にいいんじゃないか？」

子供は一寸の間黙って、ふっと足元に視線を落とした。

「神父様と同じ事を言うんだね。あ、下の村の教会の神父様。神父様だから、一応、僕の言う事を最後まで聞いてくれたんだ。

そしたら、ヒトは忘れながら生きて行く生き物だから、そんなに記憶に執着しなくてもいいんだ……って。そうなのかなあ……でも、コウジーンさんもそう言うのなら、そうなのかもね。どんなに大切な事でも、忘れちゃったら、価値も感じないもの……」
コウジーンは、何だか胸がチクンときた。

「君のその数日に、何か大切な事が交じっていたのかい？」

「えっと……」

うつ向いたままの子供は、声が小さくなった。

「あの……あのね、前回は言わなかったけれど……ごめんささい、コウジーンさん。僕が貴方にこの件を調べてって頼んだのは、村の為にじゃなくて、自分の為だったんだ」

「……………」

コウジーンはかがんで、子供を覗き込んだ。

「友達がいた……、いた筈なんだ。あの日の少し前に、この村に引っ越して来た子。お父さんが渡りの職人か何かで、一つ所に

長くいられないから、向こうも僕と仲良くなれて、凄く喜んでた。数日しか一緒に過ごさなかったけれど、僕、その子が大好きだった。今まで生きて来た中で、一番好きになったんだ。なのに、あの朝にはもういなかった。どうやってお別れしたのか思い出せない。最後に泣いていたのか、笑っていたのか、何を話したのか」

なるほど、だからこの子は些細な異変に気付き、そしてこだわったのか。

「そうか……それは悔しいよな。女の子かい？ 初恋だったとか」

「ううん」

子供は更に悲しい顔になった。

「大好きだった筈なのに、その子が男か女かも、声も姿も思い出せないんだ」

子供の涙声に、何と言っているのか分からなくなった。

「中途半端な記憶が残っちまったから、辛い思いをするんだな。そっくり忘れちゃえば楽だったのに」

つい、思ったままを口にした。しかし子供は首を振った。

「そう……でも、そしたら、その子が可哀想だよ。忘れた方は平気だけれど、忘れられちゃった方は、きっと凄く寂しいよ。自分が相手の中から居なくなっちゃうんだもん。だから、カケラでも覚えてあげて、良かったと思ってる」

「ユウジーンが長い事無言だったので、子供が見上げると、彼は口を半開きにして、夕闇の山を見つめていた。」

「ユウジーンさん、ユウジーンさん、どうしたの?」

子供の呼び掛けに、ユウジーンは呼び戻された。

「あ、ああ……いや、君の言った事を、考えていたんだ」

「そつ?」 山の方を見ているから、七時雨のオバケが見えたのかと思った

「ナナシグレ……の、オバケ?」

「あ、この地方の昔話に出て来るオバケ。あの山、昔のヒトは七時雨山って呼んだから。これ、前の時にも話したんだけど、忘れた日の事を思い出そうとすればする程、山が怖くなるんだ。七時雨のオバケが本当に居て、あの真つ暗な山から怖い目で、僕を睨んでいる気がしちゃうんだ」

山の冷気はそんなに辛くないが、苦手なのは暗闇と、神経がすり減る程の静けさだ。

リリは雪洞に分厚い毛皮を敷き、リヤマの毛布にくるまって横たわっていた。風が雪面を撫でるじゅらじゅらという音で、何度までもろみから引き戻される。

溜め息して、半身起き上がった。

別に、眠るのが目的でここにいる訳じゃない。調べものは、同じ場所と同じ時間を繰り返すのがセオリーなのだ。

「そついう事、教えてくれたのも、ジーンだったのにな……」
独り言もやけに響いて、闇に吸い込まれた。

『地の記憶を読む』という方法がある。大地に両手を降ろして、地面が過去に見た記憶の中から、自分の知りたい事を聞き出すのだ。遠い記憶程、薄くなって聞き取りにくくなる。

暗くなる前に、この辺り一面でそれを試してみた。しかし残念ながら、リリにはその術は、出来た事がない。

もっとも、少し前にナーガ長も同じ事を試したが、ここでは何も読めなかったらしい。春には溶けて流れる雪は、土の地面と違って記憶を留めにくいのかも知れない。

「カーたんなら、出来るんだろうなあ」

また独り言が響いた。

四歳の時に共に旅したカワセミは、この『地の記憶を読む』技が得意だった。何もな草原の何十年も前の戦の風景や、廃虚の街がヒトの営みで満ち溢れていた時代の景色、雪の温泉が僅かな夏の時期に一斉に開いた花で埋もれる様子なんかを、握った手を通して見せてくれた。

あの頃、蒼の妖精はみんなこんな事が出来るんだと思って、
ワクワクしたっけ。

蒼の里に来てみたら、カワセミだけが特別なんだって聞いて、
ちょっとがっかりした。蒼の長である父様でさえも、他人にそ
んなに鮮明に見せるなんて凄いな…と、感心していた。
本当に、一緒にいた時、もっと習えばよかったなあ。

斜面を雪が転げ落ちる音で、我に戻った。

まったく、ことも暗いと、思ひ出さなくてもいい過去の後悔
までじゃしゃり出て来ちゃう。しっかりしなきゃ。自分が今や
る事は、ユウジーンの記憶喪失の原因を突き止めて……。

「突き止めて…」

また独り言。

突き止めて、彼の記憶を取り返す。多分、自分の望みはそ
うなんだ。これは本当の本当「、自分の為、自分だけのわがまま。

記憶を無くしてからの、子供みたいなユウジーン。本当だっ
たら彼は、あんな屈託のない、無邪気で香気な大人になってい
たんだ。自分と会わなければ。

今、リリの事を忘れ、何のこだわりもない場所で、可愛い女
の子達と、健康的に青春している彼。記憶を戻すかこのままか、
どちらの未来が明るいかは、火を見るよりも明らかだ。そう、

今のままでいいに決まっている。

考え事は、重みのある足音で遮られた。何かいる？

——ズズ・ズズ・ズズ——

雪を軋ませて踏み締める音…意思のある生き物の気配だ。

関わりのない山の獣なら、さっさと通り過ぎればいい。しか
し足音は雪洞に近付き、周囲を回り出した。

「穴持たずのクマかしら？」

野生の獣なら大した事はない。風に乘ればこちらが断然早い
し、カマイタチで鼻先を脅してやれば、彼らはもう近付かない。

若紫は、雪に濡れない雲の上で休んでいるし、こんな事くら
いで呼び戻すのは気の毒だ。

馬に頼らず、自力だけで対処しようと考えたのは、ちょっと
した油断だった。

足音は、間隔を縮めて近付いて来る。飛び込まれたら袋小路
のこちらが不利だ。リリは敷いていた毛皮を盾代わりに左腕に
巻き付け、右手に風を蓄えた。

足音が近付く。

雪洞の縁に獣の吐息がかかるのを感じた。

今だ！

思い切り投げた風つぶてが入り口の雪を跳ね上げ、紫の前髪
の娘が飛び出した。

「—??」

そこにいた筈の『何か』の姿がない。外は吹雪だが、視界が
利く程度の緩い物だ。

取り敢えず、高い所から地面を見下ろそうと思った。

「風よ！」

右手を挙げて風を呼び、舞い上がろうとした途端、視界の雪
が消えた。

「!!」

背筋に電気が走り、本能で後ろに飛び退(す)さった。次の瞬
間、元いた場所に、プワッ! と黒い物が覆い被さった。

「何?!」

今一度、大きく後ろに飛んで、やっと『何か』の全体を見る
事が出来た。

降雪の白の中を切り抜いて、見上げるばかりの黒いモノが、
そびえている。はっきりした形はしていない。巨大な卵の中身
が、フルフルと空中を漂っている感じた。

中心に一つ、赤く光って渦巻いているのは目か? 黒い身体
の所々が、炭火みたい燃えている。もう、考えなくても、ヒシ
ヒシ伝わって来る。そんなよそこの魔物とはしべルが違う!!

リリの六感が、激しい危険を訴えた。しかし今は馬がない。
次の一手は、馬を呼びより、風を呼んで更に逃げる事に使わ
された。魔性が身体の一部を△ちみたいに伸ばして、捕まえに
来たからだ。

「あっ—」

△ちは予想外に長く伸び、リリの足首を払った。瞬間、突き
刺すような痛みが走り、雪原に転がされた。倒れ様にカマイタ
チを放ったが、黒い手はスルツと引っ込んで本体に戻った。

魔性は身体を溶岩みたいにたぎらせて、全体で飛び掛かろう
と、機を伺っている。

リリは雪に座り込んだまま、カマイタチを構えてそれを睨み
付けた。さっき触られた足が、痺れて動かない。それでも、
一歩たりとも弱気を見せちゃいけない。

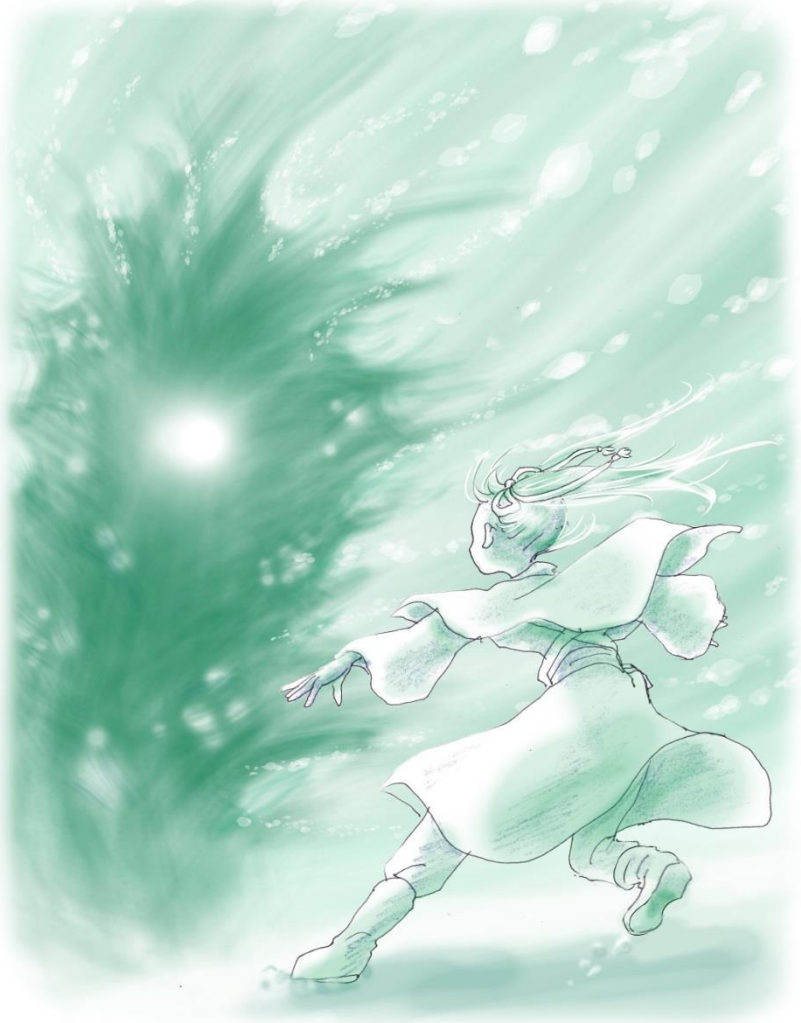
—— !! ——

まったく意表を突いて、草の馬が飛び込んで来た。
若紫? 違う、もっと大きい。

「あ、あなた、何で?」

「い、いいがら、はやへ、飛び乗れっで—」

鞍上のユウジーンが、鼻水を凍らせて歯をガチガチ言わせな
がら叫んだ。主より冷静な草の馬が、リリに後肢を差し出した。



その毛づめを両手で掴んだ。

「飛んでちょうだい！」

コウジーンが尻をバンと叩いて馬は垂直に上がった。リリをぶら下げた後肢だけは優しく折り畳まれていた。

その分、推力が足りなかったのだろう。地上から伸び上がった黒い△チの手に追い付かれた。リリの痺れてダランとなった足首に、それはビッシリと巻き付いた。途端、身体中に突き刺さる、強烈な冷気。

馬はガクンと止められた。

「おい、どうした、頑張れ！」

鞍上でコウジーンが馬を叱咤している。

「ダメよ、足を捕まれちゃった！」

足元のリリの声は、別人のように頼りなくかすれている。

「何だって、何とか出来ないのか！」

「無理、力が入らな…、あっ！」

従順な馬は、頑張って飛んで、魔物を振り払おうとしている。

「ダメ！ あんた、脚を折ってしまう！」

振り向いたコウジーンは、リリの紫の大きな瞳の奥が、水底みたいに揺れるのを見た。そして彼女は、口をキュッと結んで毛づめから両手を離れた。

抵抗がなくなって地上に引っ張られる時、リリは、全力を振り絞ってカマイタチを放った。魔性を倒せたかどうかは分からないが、捕まれていた触手は離れた。墜ちていく空中で残った力をかき集めて風を呼んだが、そこで意識を失ってしまった。

懐かしい感じがした。匂いも息づかいも、安心出来る感じ。

遠い遠い所から、意識が呼び戻された。

「おい、起きたのか？」

ジーンの声だ。しまった、寝過ごしたみたい。ジーンより早くに起きて執務室に行かなきゃならないのに。

「ん…」

変だな、身体が動かない。

「起きたのか？ 何か喋れよ」

「うん…おはよ…」

「寝惚けてんのか、でも戻ったんだな、良かったあ」

「…?」

彼の声が、妙に耳元で聞こえる。

だんだん意識が覚醒して来た。ここ、ジーンの家じゃない。えっと…彼と雪山に来たんだっけ……

身体に感覚が戻り、自分の置かれている状況に気付いた瞬間、脳に電流が走った。

「あっ、ああ・あ・ん・た、何やってん…」

「何って…覚えてないのか？ 君、氷の河に落ちこちたんだ」

懐に固くリリを抱いたまま、ユウジーンは、低い真剣な声で言った。身動き出来ないのは、二人まとめてユウジーンのマントでギュッとくるまっているからだ。

「見付けるのに時間がかかっちゃまって。シャーベットみたいな川に浸かって、身体が氷みたいだった。どう、感覚ある？」

「…う、うん…」

暗くて見えないけれど…このカンカク…やっぱり、あたし、服着てない…わよね……。

「仕方ないだろ、着ている物もバリバリに凍っていたんだから。しげしげ眺める余裕なんか無かったから、安心しろ」

リリが目覚めて安心したのか、ユウジーンはいつもの声になつた。背中に当てられた大きな手から、不安に苛まれた時間が伝わってくる。どうやら自分は、かなり危ない状態だったらしい。傍らに小さな火が燃えているのが分かる。他は真っ暗だ。

「じじ…あじじ…」

「谷の岩の隙間。上手いこと鍾乳洞っぽくなつた。場所は分からない。君を探して無茶苦茶に飛んだから。火が起こせて良かった。たまたま鞍袋に入っていたんだ。君が使っていたのと

同じ道具」

同じ道具…当たり前前、だつてあれば、ずつと前に、貴方が作ってくれた物なんだから。

「馬の奴、君の手当てをしている間に、どっか行っちゃった」

「ああ…、自分の身の安全な所に移動したのよ。草の馬は芯まで濡れると飛べなくなるから」

「そうなの？」

「空気を抱いて飛ぶからね…」

吹雪は酷くなっている。洞は奥行きがあつたので風雪が吹き込んで来る事はないが、「ウコウコ」という山なりが岩を通して伝わってくる。

「雲の上の若紫の所に行ったんじゃないかしら、仲良しだから」

「ちゃっかりしてんな」

「…ひひ…」

女の子は喋ってはいるが、目を閉じてトロトロした感じだ。出来れば馬を呼んで、麓の村に移動したい所だが、自分だけの船じゃ、吹雪の中、迷わずに行ける自信がない。

「よく……」

「ん？」

「よく見付けてくれたわね…」

「あ、うん、まあ、これのお陰だけねど」

ユウジーンは、首に掛けていたペンダントを引っ張り出した。

「これ、何か術が掛かっているんだろ？ わんわん唸ってピカピカ光って、君の倒れている方に引っ張られたよ」

リリは薄く目を開けて、ペンダントを見上げた。

「それ、まだ付けていたんだ…」

「あ…うん、タサイから外そう外そうって思っていたんだけれど、何でか付けっぱなしだったな」

「中を見ようとは思わなかったの？」

「開くの？ これ、ああ、本当だ、…何、羽根？」

ユウジーンは不思議そうに緋い羽毛を摘まみ上げた。

「昔、あたしが拾った貴方の落とし物が、それだったの」

「ぶっくん？ ね、これ、魔法の羽根な訳？」

「まあ…どうかしらね…」

リリはうやむやな返事をして、また目を閉じた。まだ身体が悪寒に支配されていたし、頭も働いていなかった。

「ねえ、寝るなよ、また体温下がるぞ」

「うん……」

ユウジーンにしたら、暗闇の中で長い事一人で不安に耐えていたんだから、折角起きたリリと、もうちょっと喋っていたか

った。

「ね、ねえっ、えっとそう、君、やっぱりやっぱり、俺と付き合っていたんだろっ」

「違っって…何度も同じ事を……」

「お、おいっ、だっって、君、お揃いのペンダントしてたじゃん。

さっき服脱がせた時、見たもん」

「それは…分けてくれたのよ…」

「えっなに？ 分けたっって、何を？」

「大昔、貴方が……」

大切な友達に、賣った、宝物の、羽根を……

四つのおあたしが、欲しがったから……

半分に裂いて、くれたの……」

「……」

リリはまた眠ってしまったが、ユウジーンは独り言のように続けた。

「それで、君は、四歳の時から、それをずっと身に付けているのか？ どんだけ律儀なんだよ」

指先の緋色の羽根は、暗がりでもだちょっと光っている気がした。

「俺もな……」



それからまた、長く感じる時間が過ぎた。懐の女の子の呼吸がしっかりして来た安心感から、ユウジーンも、ちよっとまどろんだ。

あやふやな夢を見た。

幻みたいな唄声が聞こえる。尖った高い木に囲まれた森の中。夕暮れなのか、辺りに立ち込める霧は、薄いオレンジだ。

大きな倒木があり、そのてっぺんで小さな女の子が、羽根をお手玉みたくにもてあそんでいた。唄はその女の子が唄っていた。幽かな細い唄声だった。

まどろみから覚め、ユウジーンは顔を上げた。風の音が弱くなって、洞の出口が薄ら明るくなっている。

一瞬、一寸でも記憶が戻っていないかと頭を探ったが、甘い考えだった。相変わらず頭の中には、ほんやりした子供時代の記憶しかない。

今の夢は、ペンダントの羽根を見せてくれたのだろうか？あの女の子に出逢った時、自分はどんな気持ちだったのだろうか。宝物の羽根を、どんな気持ちで半分に割いたのだろうか。他の事はどつでもいけれど、それだけは凄く知りたく思った。

ふと見ると、懐の女の子も目を開いていた。

「起きた？ 頭、しっかりしてる？」

「うん、多分……」

「動けそうか？ 俺、そろそろこの体制、キツイんだけど」

「ごめん……」

リリは身体をすらした。

ユウジーンはマントの留め金を外して後ろ向きに抜け出し、背中越しに自分の上衣をリリに渡した。燃料は燃え尽きているが、お蔭でそんなに凍えていない。

「有難う……、馬の鞍袋に着替えがあるから、それ着たら返すね」

「うん、……お！ 雪も小降りになったみたいだ。とっとと、馬を呼んで、こんな山、降りようぜ」

「……………」

「下の村に行けば、暖かい暖炉にありつけるぜ。あ、そつそつ……」
肝心の事を思い出して、ユウジーンは振り向いた。

「記憶喪失の件なんだけれど。麓の村でも、同じ時期、集団の記憶喪失が起こっていたみた……!!!」

言葉を途切れさせて、ユウジーンは駆け戻った。

薄明かなくなった洞穴で、リリは上衣を着ていたが、立てないでうすくまっていた。魔性に捕まれた足に巻き付くように、真っ黒なアザが、皮膚の下を這ってうごめいているのだ。昨日

はそんなの無かった。

「何だよそれ！ お、おい、大丈夫か？」

「慌てないで。魔性の毒が呪いが入ったんだと思う。それより、その記憶喪失の話…」

「そんな事どうでもいいよ！ 大した話じゃない。それ…それ、どうしたらいい？ 痛い？ 俺、気がなくて、ああ…」

「大丈夫だから、本当に落ち着いて」

リリはウウジーンを励ますように、笑って見せた。

「こんなのよくある事よ。油断して最初の判断を誤ったあたしのミス。里に帰れば治せるけどがいるから、心配しないで、ね」

「そうなのか？ じ、じ、じゃあ、麓の村なんかいいよ。真っ直ぐ里に向かおう！」

「そうは行かないわ。さっきの麓の村の話、聞かせてちょうだい」

「そんなの、後回しでいいじゃん！」

「ダメよ!!」

リリの強い声に、ウウジーンは黙らされた。

「あたしは長娘だもの。こんな事くらいで尻尾を巻いて任務を中途に逃げ帰ったんじゃ、他の皆に示しが付かないのっ」

「何だよ、それ?!」

「何でもそうなのっ、あんななんかに分かんないわ!」

「・・・!!」

ウウジーンは、対峙した女の子の見開いた瞳を睨み付けた。昨日までの自分だったら、売り言葉に買い言葉になる所だ。

でも、何だろう？ 今は、怒る気にならない。

大きな瞳の奥が、水底みたいに揺れているのが見えると、すうっと冷静になるのだ。そう、この娘の口から出る言葉は、本心じゃない。多分、以前の俺は、それを知っていたんだ。

「分かった、君の言う通りに…」

「ねえ…」

ウウジーンの言葉を切って、リリがいきなり押し殺した声で話し出した。

「…何でもあたしの言う通りにして。…絶対よ」

「分かった、分かった」

「じゃあ、まず、そのまま前に歩いて、あたしを通り越して、

洞穴の最奥まで行ってちょうだい」

「…?」

「振り向かないで、早くっ!」

言われた通りに洞穴の奥に移動して、そこでこっそり振り向いた。

心臓が凍った。洞の出口に、昨日のバケモノの、真っ赤な大

きな目があるのだ。

「ああああ、あれ、昨日、君の術で、木っ端微塵になった筈…」

「別の個体か、あれじゃ倒せなかつたか…。何にしても、これで嗅ぎ付けて、追いつけて来るんだわ」

リリは唖々しげに、自分の脚でうごめくアザを、拳で叩いた。

「魔性の黒い手が、炭火みたいに赤い粉をシュウシュウ吹きながら、洞の中に伸びて来た。」

「あ、あ、あう…」

「狼狽えないで。貴方はまだ見付かっている。アしが感知しているのは、あだしただけだから」

「り、了解…」

「これから何があっても、貴方は動かないで、奴に感付かれないように、そこに居るのよ」

「……」

「奴が十分離れて気配がなくなつてから、外に出て、馬を呼んで、里に戻って、報告をしてちょうだい」

「な、なに…それ？」

「何でも言う通りにするって言ったわよね」

リリは横たわったまま、カマイタチを作ろうと右手を挙げた。

しかし、キュワツと鈍い音を立てて、風は消えた。見ると、ア

ザが腕に這い上って、指を締め上げている。

「おい、君…」

「う、動いちゃダメよ…」

今の音に反応した黒い触手が、動きを早める。迫り来るそれを見て、リリは目を見開いた。

その見開いた目は、次に、自分をまたいで前に立つ、二本の脚を写した。

「あ、あんた、何やってんのよ」

「うるさい！ 長娘か何だか知らないけど、君、強がってるだけで、ぜんぜん、ヘタレじゃん！」

ユウジーンはリリを背に立ちはだかつて、両手に二本の剣を抜いた。

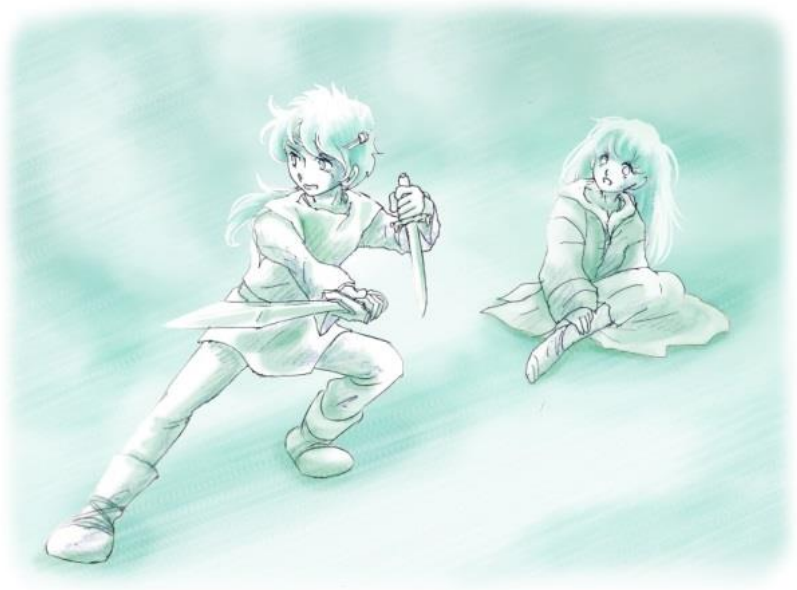
「うわああく、もっと真剣に稽古を付けて貰ったらよかつたああく。」

黒い触手が、赤い粉を撒き散らしながらシュルシュルと伸びて来た。

「うわあっ！」

——相手から目を離すな！——

あの大きいおっさんに言われた言葉が、閃光みたいに蘇った。



相手をしっかりと見たら、思うほど早くない。狙って振り下ろした右の剣が当たって、手は引っ込んだ。

次は反対から来た。

——大振りするな、相手の動きを利用するんだ！——

左の逆手の小刀が当たった。

おっさん、ありがとう〜

その後も、次々と襲って来る触手を、全部退ける事が出来た。

俺、凄いいじゃん。

リリも後ろで感心していた。

記憶を失っても、習った剣は身体が覚えているって、本当だったのね。でも…。

(触手の動きが鈍い。こちらの数と力量を伺っているだけだわ) リリはユウジーンの後ろ姿を見上げた。

剣の腕は確かだが、力が入り過ぎて、もう息が上がっている。

破邪の剣なんてとても使えないだろう。魔性が本気の早さを出したら、ひとたまりもない。

「ねえ」

「何だよ、今忙しいー」

「まだ自由な左手で、相手に気付かせないように、溜めなして」

術を撃つわ。威力はないけれど、本体を一瞬、出口から離せると思う。その隙に外に飛び出すのよ」

「あ、ああ、…君は？」

ユウジーンは触手を剣先で払いながら、リリの側まで来た。

「風を放つ反動を利用して、ジャンプするわ。別々に両側から脱出しましょ。その方が、外で馬を呼びチャンスが作れる」

「ん！了解！」

「貴方は右、いい？ 行くわよ！」

リリは、さっと左手を上げて、素早い風つぶてを、放った。

小さい風だが、出口に張り付いていた目玉に当たり、意表を突かれた魔性は反射で退いて、大きく道が開いた。

「今よ！」

リリの声にユウジーンは地面を蹴ってダッシュした。すれ違うように、太い手が一直線に洞穴の奥に伸びる。

(大丈夫、あの子、左に飛んでる筈……！)

リリの両目は、自分に向けて伸びて来る黒い手を映していた。

ジャンプしようとした瞬間、凄く早さで黒いアザが足に下がって、転ばされたのだ。

——！！——

視界に光が走った。目の前に、振り下ろされたユウジーン

剣の軌跡。

「あ、あんた、バカ!? 折角のチャンスを！」

「バカはどっちだ!!」

黒い触手が連続して襲って来るかと思いきや、攻撃は止まった。魔性は出口に戻って貼り付いている。用心しているのか？力を溜めているのか？

「同じ手はもう使えないわ。今出来る最善の方法だったのに」

リリは押し殺した声で言った。

「最善？ 君を置き去りにして、自分だけ逃げる事がか？」

「そつよ」

「………」

「今で分かった。こいつが欲しいのはあたしだわ。だから貴方のやる事は、逃げ延びて、里に報告する事なの。これがこの後、どんな大きな災厄に繋がるか分からないから」

ユウジーンは剣をシュッと振って、リリに背中を向けた。

「蒼の里なんか、クソ喰らえた」

「何を……」

「そつだよ、俺はバカだよ。理屈の前に身体が動いちゃうんだから、しょうがないだろ。悪かったよ、命がけの計画、台なしにして」

「……………」

「君は立派だよ、いつだって長娘で…」

リリの返事がないので、ユウジーンは振り向いて、ビックリした。

地面に転がっていたリリが、ゆらりと立ち上がっている。足の蛇が、身体の中で突っかえ棒みたいに伸びて、彼女を立たせているのだ。顔がロウみたいで、目の焦点がおかしい。

「おい、どうしたんだ」

出口の魔性を見ると、赤い目を不気味に明滅させている。

「あ、あ・あ・…」

か細い声を出して、リリは右手を挙げた。黒いアザが手首に伸びて、意志と関係なく、擦られている。

キン！ と音がして、掌に黄色い火花が出現した。

「ダダダメ!!」

カッと目を見開いたリリが叫んで、左手で右手を挿んで押さえようとした。

「あ、あたしの身体を使って、あんたを攻撃しようとしている」

「何だって！ めっちゃ卑怯だぞー!」

リリの右手は、石のようという事を聞かない。

「逃げて…」

「そんな事言ったって…」

出口には魔性が覆い被さっているし、こんな狭い洞穴で、飛び道具を避ける自信なんかない。

右手を食い止めようとする左手の爪が、皮膚を突き破って肉に食い込んだ。それでも黄色く光る掌は、ガンとユウジーンに向けて突き出された。

「イヤだ、イヤイヤイヤ…」

リリは、今までにないクシャクシャな顔をして、腕をガリガリ引っ掻いた。

「お願い、この腕、切り落としてっ、早く!」

「でっ出来る訳ないだろー!」

「あんたを手を掛けるなんてイヤだ、この世で一番イヤだ!!」

「イヤイヤ言っていないで踏ん張れ! 長娘だろー!」

ユウジーンは剣を投げ捨てた。そして、リリに向かって両手を開いて突進した。

「やれるもんならやってみろー!」

「バカア!」

次の瞬間、素早く身を落として、リリの懐に飛び付いた。

「頑張れ、長娘!!」
そのまま、彼女の身体を出口に向かせた。

「うんっ……うへっ……!」

リリは渾身の力で、左手で右手を引っ張った。

「たあああ——っ!!!!」

溜めに溜めたカマイタチが、出口に陣取っていた黒い魔性向かって飛んだ。カマイタチじゃない、光は翡翠の色だった。

女の子の右手を操る事だけに集中していた赤い目は、それをもともに喰らった。

衝撃音、大きな体積がドザザッと崩れる音…、と共に、洞穴内に光が射した。いつの間にか雪がやんで、朝陽が顔を出している。

「やった、やったぞー!」

ユウジーンは抱き付いていた女の子から離れて、顔を見た。

「っ?」

リリは目を閉じている。そして、彼の腕の中にくったりと脱力した。

「あっ!」

あの黒いアザがまだ右手に残っていて、蛇みたいに動いて、腕から首に這い上がろうとしてくる。

「冗談じゃない」

大慌てで彼女を背負って、マントで自分に縛り付けた。洞穴を出ると、魔性は黒い干からびた山になっている。

(もう蘇ったりしないだろうな)

「馬…、馬、呼ばなきゃ」

一刻も早く、この子を里へ連れ帰らなきゃ。馬を呼ぶ右手を挙げた。なかなか反応しない。ああ、もっと真剣にやり方聞いときゃよかった。

その時、ちょっと魔性の残骸が動いた気がした。

(いや、ないないない…!)

怖いと思っちゃうから、そんな風に見えちゃうんだよ。

やっと、上空に二頭の馬影が見えた。よかった…。

次の瞬間、ユウジーンは絶望の底に叩き落された。干からびた黒い山の中にいきなり赤い目が光って、馬に向けて触手を放ったのだ。

一頭は慌てて、上空に取って返した。

「ど、どっだけしつこいんだよ!」

残骸は欠片を撒き散らしながら立ち上がり、みるみる元の魔性に戻って行く。

ユウジーンは口をぎゅっと結んだ。そして、背中のリリを背負っているマントをきつく縛り直した。

そんなにこの娘が欲しいのかっ?! ぜってーやらねえ!
バケモンだろーがへちマだろーが、俺を舐めるんじゃねえ!!
力の限り抵抗してやる!!

開き直ったら震えが止まった。腰の剣を抜いて構えた。
魔性の本体が巨大な身体をもたげた。

—— 破邪 ・ ・ ——

静かな声を聞いた。

目の前の魔性が雷に当たったみたいに硬直し、次の瞬間、中心からバシッと分解した。そして、瓦礫の如くバラバラと落下し、地面に落ちると湯気を立てて溶け始めた。

「あ? え?」

背中のリリを振り向いたが、相変わらず目を閉じている。

頭上で、ざあっと風の音。朽ちる魔物を背景に、空から誰かが降りて来る。静かだが、ヒーンと空気が張り詰める。

一瞬、長が来てくれたのかと思ったが、違った。降りて来たのは、水色の長い髪をなびかせた、見知らぬ男性だった。

後から、さっきの二頭の馬と、もう一頭、鮮やかな毛色の草の馬が見える。遠目にも目立つ、萌え上がる夏草みたいな馬。

魔物が地面で溶けると、ゆっくり降りていた男性が急に飛

び降り、慌てた様子で駆け寄って来た。

「どっちだ? 憑かれているのは?」

頬が瘦けて目の下に隈クマがあるので、その上の三白眼がえらく鋭くおっかない。

「その娘か? 下ろせ!! 急いで!!」

「えっえっ?」

ユウジーンは泡喰って、言われるままに背中のリリを降ろした。マントにくるんだ身体を横たえた途端、肩口から、黒い蛇が飛び出した。

「ひっ!」

蛇はユウジーンに向かって飛んだ。

慌てて逃げ退きすぎた目の前で、眩しい光が炸裂し、蛇は干からびて、地面にカランと落ちた。

男性が表情ひとつ変えないで、光る槍を掲げて立っている。手を下ろすと、槍はちょっと瞬いて消えた。

「あ、あの…」

どきまぎするユウジーンの側に歩いて来て、男性は女の子を覗き込んだ。

「なんだ、リリじゃないか。大きくなったな、分からなかった」
「えっ?」



「何をやっているんだ、こんな所で。散歩って訳じゃなからうが。まあ、相変わらず仲良しだな、お前達」

「いや、そんなんじゃ…。あっ、違っ…それよりこの子、意識が戻らなくてっ」

ユウジーンは慌ててリリのマントを開いた。このヒト凄そうだし、エラそうだし、何とかしてくれるんじゃないだろうか？

「ん？ おおう！ 素肌に男物のシャツ一枚って。雪山の服装じゃないだろ？ 何をやっていたんだ？ ナーカに半殺しにされるぞ」

「そんなんじゃないッスー！」

「冗談だ」

ぜんっぜん冗談に聞こえない棒読みで言い、男性は屈んで、色の薄い三白眼で、リリを覗き込んだ。

「あの、川に落ちて、服が凍って…」

「分かっている」

男性は骨張った掌を女の子の額にかざした。

「相変わらず冗談の通じない奴だな。お前にそんな度胸があるなんて誰一人思わん。いちいち狼狽えるな」

「……………」

先にカマを掛けて来たのはそっこの癖に…。でもこのヒト、

俺の事知っているんだよな？ 蒼の里にこんなヒトいたっけ？

男性は、リリの足首と手首に少し触れてから、衣服の肩を開いた。今しがた、蛇が飛び出した所の肉が、痛々しく裂けている。

「ひい」

自分の身じゃないのに、ユウジーンは冷や汗が出た。

男性の掌が傷を覆つと、そこがぼおっと光った。しばらくして離すと、まだ黒ずんではいたが、開いた傷口がくっ付いていた。

「すっげえ、それが治癒の術って奴？ 初めて見たあ。それを出来るヒトって、少ないんでしょ？」

男性は眉間に思いっきり縦線を入れて、ユウジーンを睨んだ。

「治るのはこの娘の力だ。ボクは引き出す術すべを知っているだけ。生きる力の弱い者には幾ら施しても治らない」

「へ、へえ…」

「んん？」

男性は、まじまじとユウジーンの顔を覗き込んだ。

「まさかと思うが…まだ記憶が戻っていないのか？ 嘘だろ？」

「えっ？ 俺の記憶喪失の事、知っているんスか？」

ビクリ目のユウジーンに、男性は居丈高に言った。

「知っているも何も、お前の記憶を消したのは、ボクだ」

「ええっ? ・・ええええ——!!!!」

ユウジーンは顎が外れるんじゃないかってくらい、大口を開けた。聞き間違いじゃないよな!」

「本当に記憶が戻っていないみたいだな。呆れた…」

男性は膝に乗せたリリの、右腕の引っ掻き傷に掌を当てながら、他人事みたいに呑気に言った。

「いやっ、なにっ?! それって、ビーいつつもりっでっ? 俺、結構それで苦労してるんっすけどっ?!」

「ギャンギャンうるさい。タッパばかり伸びて、まだクチバシの黄色いヒヨッコか?」トトに物を聞くには、それなりの態度ってモンがあるだろ」

大くく深く深呼吸して、ユウジーンは男性の前に膝まついた。

「事の経緯をお聞かせ下さいませ」

「最初からさう言えばよい」

男性は目で、魔性のいた場所を指した。今は、黒い染みがあるだけだ。

「こいつは、山の精霊が固まって魔性になっちゃった奴だ」

「マジ? 精霊ってその辺に幾らでもいるんでしょ? ヤバイじゃん」

「ちょっと黙ってる。全ての精霊が、『魔』に変化する訳じゃない。たまたまだ。ヒトや獣だって、たまたま善になったり悪になったりするだろ。ただ、精霊の場合、リミットがほぼ無限だから、たまにトンでもないバケモノに進化する。そもそも精霊には意志なんかないから、魔性化しちまったら、ただ本能で、食欲を満たすみたいにエネルギーを集めよう…」

「へえ〜、あの、そろそろ、記憶喪失の話を…」

「………」

「あ、すみません、黙りマス」

「説明するのが面倒臭くなった」

「え、え、え!!」

慌てるユウジーンを尻目に、男性は手を伸ばして、先程の毒蛇の黒い残骸を拾い上げた。

「手を出せ」

「えっ…い、嫌ですよ…」

「もう屍だ、噛み付いたりせん」

「………」

ユウジーンが渋々差し出した掌に、男性は何か呟きながら、

枯れ枝みたいな屍を乗せた。

「っ?」

自分が何処にいるのか分からなくなった。

意識が覚醒すると、建物の天井が見えた。ああ、あの梁、覚えがある、昨日招かれた、麓の村の村長の家だ。自分はそのソファに寝ている…?」

「何で、一度退治したのに、この子の身体にまた蛇のアザが復活するんですか?!」

村長の声だ。

「村の他の者もか?」

さっきの男性の声。視線を移すと、やはり水色の長い髪の毛の、あの男性が立っていた。でも、服装が全然違う。

あの朗らかだった村長が、今は真っ青で悲壮な顔だ。

「そうです。貴方が怪物の本体を倒しに山に向かった、小一時間後です。皆、自宅から出てもないのに」

「うん……」

男性は、口を指で覆って考え込んだ。さっきも目の下に隈があったが、今はもつとやつれて、憔悴しきった感じだ。

やがて水色の髪の毛の男性は、寝ているこちらに近付いて、顔に

手を当てて来た。視界を覆われ、何も見えなくなった。熱い掌から、頭の中に何かがのびて来て、うごうご探られる気分。何だか凄く恐かった。

「うん…そうか…」

男性が手を離して、視界が戻った。

「こいつは空間を越えて寄生する。一度こいつと目を合わせた、恐怖の心を目印にして」

「ええっ、じゃあ、あの怪物と目が合った村人全員が、何処にいても寄生されるっていうんですか?」

「そうだな…命を分身の蛇に移して避難させるタイプだ。倒しても、こっやって複数の人間を渡り歩いて、命のエネルギーを吸って甦る。雪山で倒した本体も、今頃復活しているだろう」
「そ、そんな化け物相手に、どうすればいいんですか。命を吸われた小さい子供の中には、もう虫の息の者も…」

「うん…」

男性は、再び目を閉じて考え込んだ。

「まずは、『恐怖の記憶を持った宿主』達に、消えて貰おう」

「…は?」

また視界が薄れて、次に覚醒したのは雪山だった。

寒さはまったく感じなくて、視線が凄く高い。だが、身体が

痺れて力が入らない。

離れた空中に、あの男性が浮かんでいる。水色の髪を干々に乱れさせて、物凄く怖い気を発散させている。

「随分、逃げ回ってくれたな。もう観念しろ。お前を見た村人達の恐怖の記憶はすべて消し去って来た。命を飛ばすべき宿主はもういない。お前は独りだ」

怖い・・・観念しなきゃならないのかな？ 消されるのはイヤだな・・・

その時、別の生命体が近付くのを感じた。やった！ そいつを怖がらせて、寄生してやろう！

力を振り絞って、その命の方に飛んだ。

あれ？ 雪原に、ビックリ目で突っ立っているのは…？

——俺じゃんっ？——

また意識が飛んだ。

気が付いたら、目の前の手に、黒い蛇の死骸。

「わわっ—」

「戻って来たか？」

水色の髪の男性が、蛇の端を掴まんだまま言った。

「何が見えた？」

「何かって…俺が雪原で、ビックリ顔してた…」

「うん、お前が見たのは、この魔性の記憶だよ」

「……………」

男性は、ユウジーンの手から蛇の屍を取り上げて、元の場所に転がした。

「村人全員 of 記憶を消して、この山に乗り込んで、魔性と何日も追い駆けっこした。やっと追い詰めた所で、お前さんがこのこ現れたんだ」

「へ…へえ…」

「へえじゃない！ 簡単に襲われて、あっけなく寄生されやがって。こっちの何日分もの苦勞が、水の泡になったんだぞ！」

「で、でも、それ多分、村長んトコの子供の依頼を受けて、調査」…「

「調査あ?! 山の気配べらい感知しろ!!」の「アム」が!!」
「うっ…」

「このおじさんに逆らっちゃダメだ。百万倍になって返って来る…。」

「お前に手を掛けている暇なんかなかったから、取り急ぎ寄生蛇を始末して、記憶だけでもぎ取って放置した。凍傷べらいにはなったか？」

「凍傷じゃなくてえ！俺、向こう二十年分位の記憶が、ぶっ飛んだんですよっ」

「そんなにか？ちょっと手元が狂ったかな」

「それだけっすかっ?！」

男性のこめかみの青筋が生き物のように動いた。

「ヒヨ」がピーチクほぞくな！こちらお前さんのエネルギーを吸って元氣一杯になった魔性を、また追っかけなきゃならなかったんだ！」

「だ、だって…」

青筋を立てたまま、男性が顔をグイと近付けた。三白眼が魔性よりおっかない。

「・・・では、雪山で蛇のアザに絞められてノタウチ回るお前に、トドメを刺して行った方がよかったか・・・？」

「…スンマセン…」

ダメだもう…とにかく謝るところ…。

男性は顔を離れた。

「しかし、お前さんには、後で術が解けるよう、細工しといた筈だ。ナーガに報告して貰わなければならなかったからな」

「解けてませんよっ」

「そっだな、だから魔性も復活しちゃった」

「俺のせいっすか?」

「いや」

そこは否定されて、ユウジーンは拍子が抜けた。

「これはボクの責任だ。ナーガ任せで油断していたから」

男性は、睫毛を伏せて、膝の上のリリを見た。こんなに騒いでいるのに、この子はビクリとも動かない。

「記憶が戻らない訳は…さっき言ったろ? この娘の傷を治した時」

「えと…」

男性の声が今度は優しくそうだったので、ユウジーンはホッとしました。

「回復するのは、この娘の力。生きよって力のない者には、何をしても無駄だって。お前さんの記憶を回復するのも、お前さん次第なんだ」

「俺が…思い出したがついていないって事ですか?」

「思い当たる節があるか?」

「ないですよ、そもそも、その思い当たる節とやらも思い出せないし。そんじゃ、俺、すっとこのまんまなんですか?」

「お前が過去の自分を取り戻したいって強く思う時が来れば、可能性はあるって事だ」

「そんな…」

「そう悲観したものでないだろう、過去の自分に興味はないのか？」

「いえ…あの、たまに過去の俺に感謝したり、…あと、やっぱり、知ったときたい事はあるっス」

「じゃ、大丈夫だ。今の自分は、過去のお前が積み重なって出来た者。それが分かっているのなら、そういう時は必ず訪れる」

「は、はい…」

ああ、そうか…、このおじさん、『ちゃんと教えてくれるヒト』なんだ。怒鳴っても口が悪くても、うやむやにしないで、教えてくれぬ。

「まあ、悪かったな。本当に取り逃がすかの瀬戸際だったんだ。こんなのを、また他所で増殖させる訳にいかんし…」

男性は、「ここでやっと、すまなさそうな顔をした。」

「あの…、この魔物、一度完全に倒したのが復活したんですか？ じゃあ、また復活しちゃうとか？」

「いや、今回は原因がはつきりしている。麓の村に、記憶を消し切れなかった者がいたんだ。僅かに残った山に対する恐怖が、こいつの復活のエネルギーになった」

「ええっ」

ユウジーンは、飛び上がった。それ、きつとあの子供だ。あ

の子、今頃、寄生されてる?!

「落ち着け、村にはボクの息子が行っている。本体がキチンと滅びた所を見ると、あちらも上手く片が付いたんだろ」

「む…息子さん…」

このヒト、若いのか年寄りなのか分からないけれど、息子の方もきつと、こんなオーラバリバリの、おっかない術者なんだろっな。

男性は、もう一度目を伏せて、リリを見た。

「消し切れなかったのは、ボクの力不足だ」

「こんな凄そうなヒトが力不足って、執務室、めっちゃハードル高いじゃん?!

「後は、ナーガの仕事だ」

「ナーガ…長様ですか？」

「そう、この山の精霊が悪しき方向へ流れてしまつのを正し、魔の再発を防ぐのは、蒼の長の仕事だ」

「ふええっ、そんな事、出来るんスかっ？」

「出来るも何も、やらにゃならん。出来なきゃ蒼の長なんぞ張っている意味がない」

「……………」

ユウジーンは、魔性の中にいた時、そういうばそんなに狂暴

な心は持っていないくて、むしろ心細かったのを思い出した。

そうか…、そういうのも、すべて引くくめて続けるのが、

蒼の長…。

「その…、俺の記憶、戻るんですよね」

「お前次第だと言ったろ」

「はい…ああ、あの…」

「んんっ」

「助けてくれて、有難うっス」

「…ああ…」

魔物の黒い染みの側に長居したくはなかったが、リリをこの格好で連れ帰ったら色々保証せんぞと男性に言われ、馬の鞍袋から着替えを引っ張り出した。

「俺が着替えさせるんっスか？」

「子供の頃から手取り足取り面倒見ていただろっ」

「そんなの覚えてないし。目が覚めたらひっぱたかれるかも…」

「覚まさんや」

男性は話している間もずっと、女の子の額に手を当てている。

「しはらくは死んだように眠り続ける筈だ」

「え…、大丈夫なんスか？」

「ユウジーンは、マントを被せたマのりりに、壊れ物に触るよ

うに用心して衣服を着せた。

「疲れたんだろうな。術の力だけ大き過ぎて、身体が着いて行

かないんだ」

「……………」

「しかし、もう自分で調整出来るようになったらなまきゃいかんの、

まだこんな所でつまづいているとは、情けない」

「あ、あのっ…」

靴を履かせ終わったユウジーンは、つい声を上げた。

「ちょっとは褒めてやってもいいんじゃないスか？ この子、

本っ当に大変だったんスよ。こんな酷い目に遭っても、俺の馬

を庇ってくれたり、自分を犠牲にして俺を助けようとしてくれ

た」

「……………」

「……………」

「えっと…あの…」

「それでっ」

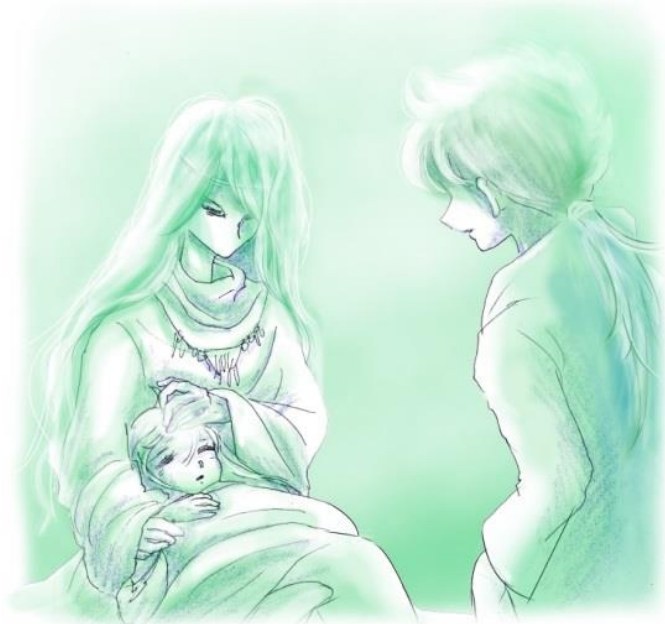
「……………」

男性は静かにユウジーンを見た。

「蒼の里の普通の娘ならそれでいい。優しくて献身的な女の子

は皆に好かれ、周囲の者を幸せにする。しかしこの娘は、長に

なるんだ」



「長が、優しくて献身的じゃイケナイんスカ」

「長は、里を背負い、多くの命を背負う」

「分かんないっす」

ユウジーンはぶてくされた顔をした。

「とにかく、長様も、執務室のヒト達も、貴方も、この子を突き放し過ぎだと思えます。この子、皆が思ってる程、しっかりしていませんよ。すく意地張るし、テンパーし」

「ああ…」

男性は、怒りもせず、逆に目を細めた。

「記憶を失くしても、見えているものは同じなんだな」

「……」

「最初から完璧な長などいない。その為、お前達、執務室のメンバーがいるんだ」

「……」

「長は、一人では、成れない」

男性の、女の子の額にかざしている掌の内側が、すっと優しく光っているのに、ユウジーンは今やっと気付いた。

リイン……

空気を震わすきれいな音の出所を目で捜すと、男性のプレスレットだった。細長い半透明な石が、小刻みに震えている。

「何ですか？ それ」

「ああ、息子が呼んでいる。そろそろボクは行く。リリを背負って一人で帰れるだろう？」

「えっ？ あの、貴方、蒼の里のヒトじゃないの？」

密かに帰り道を死にしていたのに。

「うん、まあ、里には腰を降ろしていない身だ。何だ、一人で帰れないのか？」

ユウジーンは気まずそうに口をパクパクした。

「情けない奴だな」

「だって、本当に修練所上がる頃の記憶までしかないんですけど。自分が馬に乗れるのだから不思議なぐらいで」

「ふむ…、ま、しょうがないか。ボクの責任でもあるし」

男性はブレスレットの石を握って目を閉じた。ユウジーンはまじまじとその様子を見ている。

「息子には、少し遅れると伝えた。蒼の里まで先導してやる」

「凄い！ その石で連絡取れるんですね。執務室にいくと、そんなのも支給されるんすか？」

男性は眉間に思いつき縦線を入れて、自分の馬を引き寄せた。

「頼むから、帰るまでその口、閉じていろ」

男性にリリを託したかったが、このヒトは衣の下が鶏ガラのようにガリガリだ。ユウジーンが背負うしかなかった。

「墜ちたらフォローしてやる」

と言われたが、背中に女の子の子を縛り付けての乗馬は、かなり緊張した。

「帰ったら、まず馬を労ってやれ。上空で必死に回って目印になってくれたから、一直線に来られたんだ」

「マジすか」

「お前に忘れられたまじじゃ、可哀想だぞ」

ユウジーンはちよっと思索してから、おすおすと切り出した。

「あの…、おじさん、俺の事、割りと知っている方？」

「…そんなには知らんぞ。蒼の里に住んでいないんだから」

「ちよこつと教えて欲しいんす。俺、この子と付き合っていたのかなア？ 誰も、はっきり答えてくれないし、それでいてさ

みのある言い方するんだ」

「・・・本人に聞いてみればよからう」

「聞いたよ。全否定だった」

「……………」

「しゅーもない事、聞くな…って思ってるでしよ。俺だって最

初は、気に止めていなかった。こんなちっちゃい子と付き合つ訳ないじゃんって。でも、もしかしたらって考えたんだ」

「ふむ。」

「もしも、付き合ってたヒトが、自分の事を忘れちゃったら、どんな気持ちだろうって。自分に置き換えて考えてみたら、やっぱりそりゃ、キツイだろうなって」

男性は、馬をユウジーンの方に寄せた。

「付き合ってるかどうかというのと、やはり付き合ってるはいなかったんだろ？」

「へえ？ そつスカ？」

「この娘は男性とただ『付き合つ』事はしない。長娘だからな」

「また『長娘』ですか。長娘だからって自由に恋愛しちゃイケナイって法はないっしょ」

「恋愛しないという事ではない。ただ、男性側にしたら、長の血筋の娘をめとるってのは、相当な覚悟が必要なんだ。この娘は、相手にその覚悟を求めなきゃならないのが、嫌なんだ」

「恋って…そんなんじゃないでしょ？ 覚悟する気のないヒトを好きになっちゃったら、どうすんの？」

「その者の幸福をひたすら願っただけだ」

「・・・じ、じゃあその、覚悟を持つてる男に、ずーっと巡り逢わなかったら？」

「ずーっと独り身だろうな」

「……………」

目を見開いて口をへの字に結んだユウジーンを、男性は横目で見て、それから彼の背中のリリに、スイと手を伸ばした。

「何をするんですか？ 起きちゃいますよ」

「起きないさ」

彼女の首から引っ張り出したのは、ユウジーンとお揃いの、布のペンダントだった。

「この中の緋い羽根は、お前とこの娘を繋ぐ絆だ。過去の二人がそんな気になるんなら、見せてやるぞ。今だけ出血大サービスだ。どうする？ 見たいか？ この娘の真実(ほんとう)。ただし、見るには、それなりの覚悟が必要だぞ」

「……………」

昼下がりの執務室は、ちょっとざわついていた。

今しがた帰ったユウジーンが背負っていたリリが、長椅子に寝かされている。ナーガ長がずっと額に掌を当てている。暖炉で暖められたのもあって、やっと頬に赤みが差して来た。

ノスリは、ユウジーンに伝言を聞いた途端、大急ぎで外に飛び出して、馬繋ぎ場に走って行った。

「カワセミだ、いつもの場所に居る」

「あんな伝言で分かるんスか？」

まだ旅装姿のユウジーンは、突っ立ったままホルズに聞いた。

「そりゃまあ、親父の古い親友だからな。それよりお前、カワセミ殿に失礼はなかつたらうな」

「へっ？ 偉いヒトなんスか？」

「名前を聞いた事ないか？ 蒼の里の不世出の術者だよ」

「ふええ、俺、『おじさん』とか言っちゃった」

「・・・よく馬から叩き落とされなかつたな・・・」

どうやら、村丸ごと記憶を消すとか、屍から汲んだ記憶を他人に見せるとか、当たり前になっていたが、トンでもない事らしい。

「もう大丈夫だろう」

ナーガ長が、リリから掌を離して言った。

「カワセミ殿が、かなり手を尽くしてくれたようだ。さて、ユウジーン」

「はいっス」

「きちんと報告してくれるかい？ さっき大体の事は聞いたけれど、はじめも必要だから」

ユウジーンは素直にナーガ長の大机の前に立った。

ホルズが、ほほお、って顔をして壁際に座り、小間使いの少年が、筆記のペンを取った。

「えっと、まず、この子…、リリがこんな酷い目に遭ったの、俺が楽をしようとして、別行動したからミス、すみませんッ！」

ユウジーンは直角かと思える角度まで、ザッと頭を下げた。ホルズも少年も、目を丸くして息を呑んだ。

「うん、そこは、リリに任せていたから、私に咎める事は出来ないよ。私を含めて、皆の油断だった。頭を上げなさい」

長は静かに言った。

「調べに行った事の結果を聞かせておくれ。簡略でいいからね」

「あ、はいっス、俺の、記憶喪失の原因は、カワセミさんが魔物を倒すのに必要だったからでっすっ、おしまいっ」

「簡略過ぎだぞ」

ホルズが苦笑いした。

「よく成し遂げたね。私は君を誇りに思う。これから里のどの場所に行っても、君はきつと立派な者になれるだろう」

ナーガ長が微笑んで言った。

そう、この調査をやる条件は、ユウジーンが執務室を退職する許しだったのだ。ホルズは複雑な顔で両者を見た。

「その事なんですけど…」

「コウジーンは鼻の下をこすった。」

「俺、やっぱり、執務室に残りたいんですけど…、ダメですか？」

「ホルズは喜びが顔に出たが、ナーガはすまして聞いた。」

「ほお、気が変わった理由は？」

「んと、えと、カワセミさんに聞いて…いや、やっぱり、なんとなくっス」

大真面目に、すべてそのまを書いていた書記の少年が、へうへえくって顔をした。

「構わないよ、覚えて貰う事が沢山あるから大変だろうけれど、頑張りなさい」

「ういっス」

「まずは言葉遣いだね」

「はっいっ！」

ナーガはホツとした顔で、ホルズと目を見合わせた。なにはともあれ、喜ばしい事だ。

「あと、長様に幾つかお願いがあるんですけど、今言ってもいいテスか？」

「ああ、何だい？」

「俺、剣技をもういっぺんちゃんと習いたいです。いざという時に使えないんじゃない、ホント、情けないっスから」

「そうかそうか、ノスリ殿も喜ぶだろう」

「あと、馬の乗り方も、一から練習したいです」

「うんうん、教官を頼もうな」

「それから、リリが大きくなったら、お嫁さんにしたいです」

「うんうん、そうだね…え？…?!?!」

ナーガはニコニコした顔のまま、ノリ付けされたように止まった。ホルズもさすがにリアクション出来なかった。

もしも執務室に意識があったなら…、今と全く同じ景色を思い出しているだろう。

大昔…、今、ナーガの立つ場所には、その父親のツバクロがいて、コウジーンの立つ位置には、若い日のカワセミ。娘を妻にしたいと言う男に、ビックリ目の父親。ああ、君は本当に、父と全く同じ目をするんだな…と。

「あのその、今すぐでなくて」

「コウジーンが慌てて言い直した。」

「リリがねっ、将来、どーしても、どおおーしても、伴侶が見付からなくて困っちゃった時は、俺！ 立候補しますっ！

って事です。だって一生独り身とか、可哀想じゃないスカ。この子の相手が見付かるまで、俺、独身でいますから」

何が起こっているのか把握出来ずに呆然と口を開けている大机の面々の代わりに反応したのは、長椅子のリリだった。

実は、(剣技を習いたい)〜あたりから、トロトロと目覚めていたのだ。

「だああああ!! あんた!! 何よそれ?! 何なのよ!! その『ヒトが売れ残るの前提』の立候補はっ?!」

「いいだろ? 保険になってやろっつてんだから。奇特じゃね? 俺。元気一杯じゃん、良かったね」

「あたあたあたしの選ぶ権利はっ?! 誰があんたみたいな大人ガキ!!」

「なあんだよ、雪山で素肌を寄せ合った仲じゃん」
リリが、長椅子から跳ね上がって、ユウジーンの胸ぐらを掴んだ。

「だ、黙りなさい! シーンッ!!」

.....!! !!

雪山の魔性が倒れた時と同じように、ユウジーンが感電したみたいに、ビビクン! と震えて止まった。

「え…えっつ…あれっつ…」

蒼の里より少し離れたハイマツの丘。

てっぺんの砂利に立つのは、ノスリと、水色の長い髪のカワセミ。

「お前もヒトが悪いな。教えてやりやいのに」

「教えようかとも思ったんだが、何か、イラッときたんだ」

「ははは…、分かるけど」

「記憶喪失の暗示が解けるキーワード…へリリに名前を呼ばれる事…時間が無かったから咄嗟に思い付いたんだが、無茶じゃないだろ? 里に戻ったら一番に呼ばれると思っていたんだ。まさか一ヶ月間、一度も呼ばれなかったなんて、心底ビックリしたぞ」

「ああ、俺も妥当なキーワードだったと思うぞ。最初にナーガがテンパリ過ぎたから、タイミングを無くしたのかもしれんな」
ノスリはハイマツの表面を覆うさらめ雪を眺めながら言った。
この丘の景色だけは、昔から変わらない。

「普段冷静な癖に、テンパったら子供みたいになる所なんか、ホント、ツバク口を見ているみたいだ」

「そっか…」

カワセミも相棒と並んで、同じ景色を見つめた。

長は一人では成れない。長になってからだって、けして独りにはしない。親友の大切な忘れ形見を、内と外から支える事。言葉にしなくても、この二人は、たまにここで会って、それを確認し合う。

風がハイマツの雪を散らして、ノスリは話を戻した。

「そう言えばリリの奴、ずっと『あんた』とか『貴方』だったなあ。本人は意識していなかったんだろ？」

「妙な線引きをするところは、長の家系の特徴だな。ツバクロの奥方が、めっちゃそんな感じだったぞ」

「はは…、リリにとって、シンリィともルウシエルとも逢っていない彼は、『ユウジーン』『じゃなかったのかもな』」

「まあ、でも、奴はやっぱりユウジーンだ…」
カワセミは、静かに自分の手を見た。

リリのペンダントに触れて、彼が何を見て来たのか、自分には分からない。カワセミはただ手助けするだけ。すべては手を伸ばした者次第なのだ。本人が何も持っていなければ、何も得る事は出来ない。

あの後、帰りの馬上で、あれだけお喋りだったユウジーンは、口を結んでずっと黙っていた。

「むしろ、ボクは、煩わしい大人の記憶のない、純にガキンチ

ヨなユウジーンの方が、好きかもしれないな…」

都合のいい物語だと、記憶喪失から蘇った者は、記憶を失っていた間の事は忘れていたりする。

しかし、ユウジーンは、それらの記憶も全部持ったまま、煩わしい大人の世界に戻って来てしまった。その間にやらかした『純にガキンチヨな所業の数々』も、しっかり覚えたままという、まことに気の毒な状態で…。

ナーガ長が、大机に両肘を付いて、ニコニコしながら聞いた。
「うん、じゃあ、話してくれるかい？ 特にその、『素肌を寄せ合った』って所を詳しく」

笑顔の中の、目だけ笑っていなかった。

七時雨の山を頂く水門の村。

今日は久し振りに太陽が顔を出して、白が目に眩しい。

ユウジーンは、村長の所の子供と並んで、水門の上に立っていた。

「全部は話せないけれど、皆の記憶が飛んじやったのは、病気じゃない。この村に入り込んだ悪い奴をやっつける為だったんだ。だから、記憶を戻す事は出来ない。許しておくれ」

「うん、いいよ、ユウジーンさん。調べてくれてありがとう。」

大人の中に信じてくれるヒトがいてくれただけで、とっても嬉しく」

子供はユウジーンを見上げて、笑顔で言った。

「それに、聞いて。あの友達に会えたんだ」

「本当かい?!」

「お父さんが、まだ仕事でこっちに來たからって、寄ってくれたの」

「そうか、よかったなあ！ 忘れちゃった間の事とか、教えて貰えたかい?」

「ううん、急いでいたみたいで、本当に会っただけだった・・みたい」

「んん」

「あれ、やっぱり姿とか声とか、思い出せないや? あ、でも、今回は、宝物買ったんだ。ほらー」

子供は、ポケットから大切に折り畳まれたハンカチを取り出した。開いたその中には、小さい緋い羽根が、ふうわりとおさまっていた。

「ねえ、嫌いだったら、宝物くれないよね。だから、この羽根を見ているだけで、とっても嬉しくて、幸せになる。その子が僕を好いていてくれて、僕もその子を好きで。それだけで十分だったんだ」

雪を頂いた山は、何事もなかったかのように、ただ白く光っている。

暖炉の前で、カノンはうんざりして書物から顔を上げた。

さっきから止まらないリリの愚痴に、文字を読む事を諦めたのだ。

「いいじゃん、ユウジーンの記憶が戻って、何もかも元通りなんだでしょ? 執務室だって万々歳だし」

「だってあのバカのせいで、あたし、部落内を顔を上げて歩けないのよ!」

「それ、どちらかというと、ホルズさんのせいでしょ?」

あの時の執務室の騒動を、勤勉な書記の少年は、真面目に議事録に記していた。

帰りがけに少年が、へこれやっぱり破棄しましょうか? と渡した書面を、ホルズが自宅に持ち帰り、あろう事か、妹達に見える場所に、わざと放置したのだ。ノスリ家の女性陣の情報拡散力は、ある意味、魔性より脅威だ。

翌日朝一番に、ユウジーンは付き合っていた女の子達に再度ひっぱたかれ、リリは遠慮のないオバチャン連のお節介から、逃げ惑わねばならなかった。

「蒼の里公認カップルになれたんだから、イインじゃネ?」

と、ユウジーンの口真似で茶化すホルズには何を言う気力も起らず、リリはこつしてカノンに愚痴を吐き出しに来るのだ。

「だってリリ、ユウジーンに何の不満があるのさ。誰一人反対していないし、彼と一緒になつとけば、何の心配もないじゃん」
「カノンまでそんな事を言うの? そついう問題じゃないでしょ?」

いつもは、この娘が怒鳴り出すと、退いてしまつカノンだが、この日は黙らなかつた。

「リリはいつまで白馬の王子様を夢見るお姫様でいるんだか」

「なつ何よつ、それ?」

「じゃあ…」

少年はいきなり立ち上がって、リリの手首を掴んだ。

「な・な・…」

「なつてやろつか、白馬の王子様!」

「え・っ・…」

「シドさんがエノシラさんを連れ帰つたみたい、僕がリリを拐つて帰つたつていいんだ」

「は? あ? へ? ほ…本気なの?」

長いのか短いのか分からない時間が過ぎて、カノンは肩を降

ろして、硬直する手首を突き放した。

「冗談だよ。本気にしちゃってバツカみたい。分かった? そついうのが、お姫様気分だつてんだ」

「何よそれ! 何よそれ! 何よそれ! デリカシー欠如男! 大ッ嫌い!」

捨て台詞を叫んで、リリは頭から湯気を噴きながら出て行つてしまつた。

「ちえ…」

カノンは読み掛けの本には戻らず、暖炉に寄つて火箸をかき回した。

「デリカシーがないのはどつちだよ」

暖炉の横に、まだ置きつ放しのユウジーンのカラクタがある。こんな物の中に、術に使えるような物、ある訳ない。

「ちよつとへらへら、本気にして、ときめいてくれたつていいじゃん…」

しばらく焰を眺めてから、カノンは立ち上がって、三重の御簾に手を掛けた。

御簾の向こうのひんやりした室内は、彼にとつて、ちよつと危険だ。でもあの時は、リリのやつれ顔を何とかしてあげたい

「心で、ひとつの賭けに出た。本当に、ただただリリを安心顔にしてやりたかっただけだった。」

冷気を吸い込まないように呼吸を止めて、奥のリリのベッド横の窓辺に寄る。そこには、去年彼女がノスリに買った、光る翡翠石がぶら下がっている。

「だから、そんなに便利にボクを呼びなと言っただろう?」

暗闇の結界の中で、水色の妖精が睨み付けた。

「お礼を言おうと思っただけ。」

翡翠石を握り締めて、少年は会釈をした。

「ん? ああ、この前聞かれた奴か。『愛着のある持ち物』が無い場合のヒト捜しの方法な。上手く行ったか?」

「はい。ちょっとデンジャラスでしたけれど。」

「そうか、良かったな。ボクは、『物』が無ければ『者』でもいいで、って教えてやっただけだ。心臓の鼓動を掌に伝える必要があるのが、ちと面倒だが。後はキミの力だから、わざわざ礼を言われるような事でもない。キミの呼び掛けて、いちいちそちらに通じる結界を作らなきゃならん方が、面倒なんだがな。」

「はあ、すみません。」

「まったく、なんでそんな、翡翠石からボクに呼び掛ける術なんて使えるようになった? ナーガは教えんだらう?」

「駄目モトでヤケクソに石を握ったら、出来ちゃったんです」「嫌なヒヨッコだ。」

カワセミは、心底嫌そうに、眉間に縦線を浮かべた。

「今度こそ念を押すが、もうその石を使いな。そもそもリリの持ち物だろう、それは。」

「あ、じゃあ、今、一個、頼み事してもいいですか?」

水色の妖精は、縦線の本数を三倍にして睨み付けた。

「な・ん・だ・?!」

「春になって、僕が外に出られるようになったら、連れて行って下さい。」

「.....」

「僕...分かっていました。ユウジーンの記憶を戻すキーワード。帰って来た時から、視えていました。」

険しい顔をするカワセミの前で、少年は罰悪そうにうつむいた。

「どうせ名前なんて、そのうちすぐに呼ばれると思っていました。なかなか呼ばれないって分かったら...ちょっと意地悪しなくなっただけです、だって...」

「だっての先は、少年は呑み込んだ。」

「僕、本当にくだらない奴です。こんな事で意地張って、本当

に必要な時に、リリの危険を予知してやれなかった。最低です」
「……」

「なんだかもつ…なんだか、物凄く、貴方に叩き直して貰いたい気分です」

「ガキンチョは自分勝手に始末におえない」

水色の妖精は毒を吐いたが、言葉とは裏腹に、穏やかな口調だった。

「丁度明日から温暖な東国に発つ予定だ。その気があるんなら、春とはいわず、今すぐ着いて来い」

午後の穏やかな日差しが、ちよっと窓の氷を緩めている。

西風の少年のいた暖炉の部屋は、きちんと火が始末され、寝具も書物も、きれいに整えられている。

「几帳面は父親譲りなのでしょうね」

先程ハイマツの丘で、旅立つ少年を見送ったナーガ長は、定規で測ったみたいに角が揃った書物を眺めて、苦笑した。

外から、リリがユウジーンを怒鳴りつける声が聞こえて来る。まだ何か無神経を言ってるせんだらう。カノンが急に行ってしまった事を知ったら、二人とも、寂しがるだらうな。

ヒトは確かに、忘れながら生きて行く。全部を覚えている事なんてないだらう。だからこそ、その中から残った、大切に握り締めたそれが、本当の本当に、宝物になるのだらう。

明るい陽光に、窓のつららが、翡翠石のカケラと反射し合って、唄うみたいにきらめいていた。

〜おしまい〜

二〇一三・六・一〇

